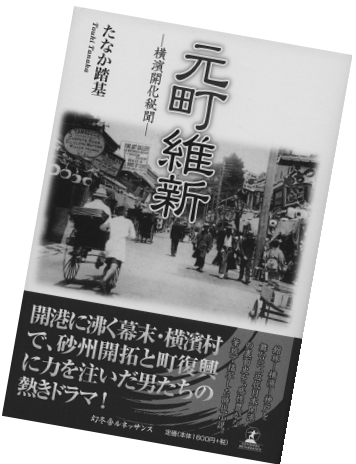


二人の男の俠氣と憂いの物語

幕末期から明治初期にかけての横浜・元町の「始まり」を描く

植田隆



なく、読者の身近な何処にで

る。「家を捨て郷里を捨てた辰五郎と次郎左衛門が、互いに胸襟を開いて己の素性を語り合ったなら、二人は歳の差を越えて互いの煩わしさから逃れていたに違いない。次郎左衛門が昔御屍埋葬人をしてい

たように、辰五郎もまた路上で行き倒れの人間から金品を強奪し埋葬していたからである。二人の思いは、幕末から明治初期の浪士や侍が念仏のように口角泡を飛ばして唱える、尊皇攘夷とか開国とかの話でなく、日本人が俠氣を失い異国人の言いなりに成り下がることへの憂い、あるいはまた、この元町から山手界隈が、異国人達の野心の果てに属国と化すことへの憂いに似ていたかもしれない。／今

のところで二人は、井戸の掘削業務を通じて、雇用主のジェラルドの水屋敷に通い、対価を貰う親方と使用人という関係だった。」

この描写は、物語の後半部にあたり、対峙していた次郎左と辰五郎の関係が、やがて信頼という関係性へと変わり、そのことによりジェラルドの脅力となって西洋瓦の発展に寄与していく契機となる重要な場面だ。多くの無名の大衆よりさらに下位の者に見做される存在としてあった二人を、幕末明治初期という激動の時代のなかで照らし出そうとした著者の思いに、わたしは率直に共感したとい

つておきたい。だからこそ、例えばわが国の現政権が、尖閣諸島などの問題を回避しながらも、TPPの締結は平成の開国だなど能天気な発言をしているのを見るにつけて、「尊皇攘夷とか開国とかの話でなく、日本人が俠氣を失い異国人の言いなりに成り下がることへの憂い」や「異国人達の野心の果てに属国と化すことへの憂い」といったことを、わたしたちは、切実に考えなければならぬ段階にいま、あると信じている。歴史小説とは、過去の時間の物語であっても、それが、現在へと架橋されていなければ、物語を紡いだことにはならないというのが、わたしなりの捉え方になる。(評論家)

わが国第二の都市・横浜(人口・三百六十万人、第三位の大阪が二百五十万人)は、江戸(東京)や大坂と違い、江戸末期までは半農半漁の小村でしかなかった。一八五三年、浦賀沖にペリーが来航し、翌五四年に横浜村で日米和親条約が、五八年には神奈川沖の船の上で日米修好通商条約が締結されたことによって、江戸幕府の鎖国政策に終止符が打たれ、それを機に横浜は急速に発展していくことになった。本書の書名のように、「維新」、開化」といった明治期に冠せられる言葉は、横浜の中心地としてあった元町にこそ、相応しいかもしれない。

本書は、幕末期から明治初期にかけて元町の新興開拓を担った人々を、歴史的背景とともに活写した物語である。実在した人物と物語上の人物を巧みに交差させ、物語を醸成していく著者の筆力は、わたしたちが現在知っている「元町」という場所の「始まり」を、鮮烈に浮かび上がらせてくれる。

そして、なによりも本書がそうした喚起力を内在させているのは、「小説とは物語性が信条で命でもある。／読者は、歴史的背景を理解した上で、または歴史的背景を理解した人がその小説を読む」、「主人公としては、著名人

に物語の軸として際立っていない

に物語の軸として際立っていない

▼たなか踏基著『元町維新』
横浜開化秘聞11・10刊、四
六判三二〇頁・本体一六〇〇
円・幻冬舎ルネッサンス